

教派研究

目録

- 1 天主教とは？
- 2 新教内の異端に就いて
- 4 洗脚禮の問題
- 5 安息日の問題
- 6 聖靈の問題
- 7 洗禮の問題

教派の研究

基督教と言っても非常に種類が多く、人の言葉を神の言----聖書----よりも重く見るものや、土曜日を聖日として守るものや、異言を語る事を誇りとするものや、脚を洗う事を聖禮典とするものや、キリストの再臨する日を計算して決定するもの等種種雑多な教派がある。

私共は此の小冊子に於いて、如何に信じ、何を信じたら良いかを研究し、異端に隨ちて神の聖名を恥かしめ、神の教會の迷惑にならぬ様にし、共に正しき信仰を保ちて、神の教會を擴張し、正しき信仰を多くの迷へる兄弟姉妹に宣べ傳へ、以て神の國を此の世に建設し、父なる神に榮光を歸するべきであります。

1 天主教とは？

御承知の様に基督教には舊教と新教の別があります。言ふまでもなく舊教とは羅馬天主教のことで、新教とは謂プロテスタント教のことを言うのであります。前に在ったが故に之を舊教と言ひ、後に起つたが故に之れを新教と言うのであります。では何故プロテスタント教が起つたか？私共は歴史をふりかへて見る必要があるのです。教會はその初めから常に如何にして改革せんかとは多くの人達の頭を悩ました大問題でありました。これは天主教が非常に腐敗し、其中に賄賂が盛に行はれ、教職は公に賣買されて、教會の勢力は俗人の手に歸し、義人を殺しルーテルの時に至りて更に甚だしく、而して今の時に至りて尙ほ然りであります。かくて教會は救濟の機關ではなくして迫害の機關であります。その中でもルーテルの時代に於ける天主教會の腐敗と言うものは實に言語問斷でありました。

其頃地上に於けるキリストの名代としてローマの法王位に坐りし者の多くは敗徳亂倫の人でありました。その代表的人物とも稱すべき者は有名なるアレキサンドル第六世でありました。彼は獨身生活を標榜せる僧侶階級の首長でありながら、自身四人の息子と一人の娘を設け之に高位を受け、高録をあたへ、一家擧りて此世の榮華に耽りまました。彼の寵兒をシーザ・ボルジヤと言ひました。佞奸

極まる人でありまして悪といふ悪は一つとして行はざることなしと言はれた人でありました。然るに彼は彼の父の教權の下に立ってバレンザの大僧正の聖職に就き又法王廷内閣員の首席に坐して、父と共に教權を擅にしました。そして父子共謀して一僧侶を毒殺せんとし、誤ちて自らその毒を飲み、父死し、子は幸に死を免がるを得たとのことでありました。然も斯かる人がキリストを代表して教會を治め、教會も亦彼等を戴いて敢て自から改めんとしなかつたのであります。以て其の腐敗の程度を堆量することが出來ます。其他ヨハネ第廿三世の如き、シワクスタス第四世の如き、イノセント第八世の如き、ジュリウス第二世の如き、パウロ 第三世の如き、何れも似たり寄つたりの法王で、彼等はその實子を甥と稱し、而して甥を庇保ふと稱して其の實子に高き教職を授けました。英語の Nepotism なる辭は之より起りました、即ち甥舅負の意でありまして、今は「親戚推薦」を意味する辭であります。ルーテル時代の法王、大僧正等が其の私生兒を甥なりと稱して之を顯位につかしめしより起つた辭であります。

此時に又赦罪券なるものが盛に販賣されました。赦罪券はローマ法王廳の發行にかかる者でありまして、之を購ふ者は教會の課する懲罰を免かるを得、更らに進んでは來世に於て受くべき刑罪を免がるを得べしとのことでありました。而して迷信に沈める當時の歐洲人は争つて之を購ふたのであります。故にローマ法王廳に於て何にか募金の必要を感じる時には必ず此の赦罪券を發行したのであります。甚しきに至つてはある法王の如きは、其の私生兒の嫁仕度の費用にあてんために此の赦罪券を發行したとのことでもあります。後日ルーテルをして終りに黙する能はざらしめしもるは實に赦罪券發行の惡事でありました。

法王、監督が斯くの如くでありました故に其の他の事はおして知るべきであります。而して如何にして此の天主教會という暗き團塊を改めんか、これが聖徒等の心を悩ます問題であつたのであります。しかもルーテル時代に於ける歐洲に於いて、宗教と言へば天主教唯一つであり、教會と云へば唯一つ、即ちローマ天主教會のみでありました。之が全歐洲の宗教であり、當時の文明世界は齊しく此の宗教を奉じ、此の教會に属したのであります、若し外面の一致が基督教の理想であつたならば其時此の理想は此世に實現したのであり、其時實に全歐洲を通じて「信仰一つ、バプテスマ一つ」であつたのであります。全歐洲人は皆同一の法王を戴き、同一の教會條例の下に彼らの信仰生涯を送つたのであります。其時歐洲人は擧てローマ天主教會の信者であつたのであります、故に其時に於ける天主教會の腐敗は害毒を全歐洲に流すものであります。歐洲人の宗教的信仰は勿論、其政治、經濟、文學、藝術までが腐敗の影響を蒙つたのであります。故に問題は單に教會改革ではなく歐洲改革でありました。如何にして全歐洲の社会を其の根底に於いて改めんか、之れか問題であつたのであります。

茲に於いて多くの改華草案が講ぜられました。或は内よりせんとするものあり、或は外よりせんとするものもありました。文學の方面より、信仰の方面より、聖書の方面より、社会組織方面より、同一の問題は考究せられました。然しながら人が欲望して止まざりし改革そのものは舉りませんでした、天主教會は改めざるべからざるとは、何人も唱へし所でありましたが、何人もこれを改め得ませんでしたことは餘りにも重大でありました。志士の絶叫も識者の論難も、聖徒の祈りも、學者の研究も天主教會なる病人の治癒には何の効驗もありませんでした。改革の必要は既に充分に認められ、改革の途は既に充分に講ぜられ、改革の時機は既に充分に熟した様に見えましたが、然し改革の実はありませんでした。茲に於いて改革は決して人間の業でない事が分ります。才能あり、熱心あり、智識あり、道德ありて、未だ改革を行ふに足りません、之に上の力が加はねばなりません。ルーテル以

前の改革者は改革の能力を人間の中に求めて、之を行ひ得ませんでした。然るにルーテルは改革すら思はず、唯單に神に仕へんと欲して、己れは欲せざなに終に改革の任に當らざるを得ざるに至りました。彼に學問、信仰、聖書の智識があつた、然し彼にこの準備ありて未だ改革者となるに足りません。彼は神に由りて再び生れました。彼は世を改むるに先立ち、神に己れを改められました。ルーテルが他の改革者に異なりて力ありし理由は全く此の点にあります、故にルーテルの前に當れる困難の大山は何の苦もなく平地と化したのであります。

そればかりではなく、ローマ天主教の中に於いては、人の智識によりて作り出された組織をもち、罪ある人をキリストの名代とし、その語を聖書よりも重く見、その多くの教は神様の示された標準から遠く離れ、その爲に實際の行爲も又益ますあやまって行つたのであります。例へばマリヤや諸聖徒に對する祈禱の如きは聖書の中に証明し得ず、又私達の罪惡を煉淨する事の出来る「煉獄」の教訓の如きは聖書の根據がありません。

以上論じて來た如く天主教は、宗教團體ではなく、諸外國と大使、公使を交換する政治團體であり、聖書の教へを遙かに遠く離れた人物崇拜をする偶像教である、故に私共は之を信じて永遠への硫黄の火の池に落される事のない様に細心の注意をすべきであります。

2 新教内の異端に就いて

基督教は最初から多數の偽りの先生達が出て、色いろな方法で信者達を惑はし、誤つた道に導いた。パウロ先生が、ガラテヤ教會を建設すると、間もなく偽の先生が現はれ、その信者を惑はした。其の時から現今まで此等偽の先生達の誤りは等しく聖書の教へを正しく理解しなかつた事に依り、又此等の人達は常に聖書を引用して彼等の意見を証明する。

パウロがガラテヤ人に書いた手紙は、即ち、此の様な偽りの先生達が現れてガラテヤの信者達を惑はした爲に書いたもので、パウロは非常にはつきりした言で、それら偽の先生達を攻撃し、「されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らの曾て宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふ者あらば詛はるべし」(ガラテヤ書一章八節)と言はれた。

今日、私達も當然、聖書の教へに合はず、非常識なキリスト教を宣傳してゐる偽の先生達を攻撃しなければならない。今私が話さうとしてゐるのは特に、近頃臺灣各地で私共の教會を邪魔をしてゐる真耶穌教やその他の教派の教へを研究し、彼らは聖書の教へる通りに教へたり、行つたりしてゐるかを見たいと思ふ。私達は真耶穌教やその他の教派の全體を此の、小さい文章で議論しかねるが、彼等の力説してゐる四つの事項を研究したいと思ふ。

3 洗脚禮の問題

真耶穌教の信者達は、洗脚禮は、イエス様の御名命である故に信者は互に脚を洗はねばならないと主張する。

此の問題について聖書は何んと教へてゐるか？ 家に入る前に先づ脚を洗ふ事は、昔のユダヤ人達の習慣である。創世起十八章四節、十九章二節、二十四章三十二節、四十三章二十四節、ヨハネ傳十三章十節、テモテ前書五章十節等る記事は、聖書の中で人の脚を洗ふ事について書いてゐる箇所、

昔、ユダヤ人は今日の様な靴がなかった。大部分のものは跣足で、靴をはいてる者は少く、又當時の靴は草鞋の様にひもで結ぶものである。パレスタタン地方は非常に乾燥してて埃が多く、道を歩く時、如何に近くても此の様な靴では埃が脚につく、それ故家に入る前に脚を洗ふ事は非常に大切である。脚を洗ふ習慣は非常に良い。今日でも、人が脚を洗ったり、お互ひに脚を洗ひあつたソ、真耶穌教信者のそうする事も悪くはない。脚の汚れてゐる時は洗ふべきづある。然し脚を洗ふ事をもつて宗教上の儀式とする事は間違つてゐる。

脚を洗ふ事がイエス様の命ぜられた宗教上の大切な儀式である證據は聖書のどこにも見出す事は出来ない。新約聖書はイエスの昇天後、マルコが先づ福音書を書いた。マルコはキリストの世に居られた時の御仕事と大切な教訓とを書いた。主あ晚餐、洗禮の必要や、他の大切な教訓に、力を入れて書いてるが、お互ひに脚を洗ふ事はイエス様の行ふべき大事な御命令であると書かれてゐる個所を見出す事は出来ない。マルコの後間もなくマタイとルカとがつづいて基督教の重要な教義の福音を書いたが、マルコと同じくお互ひに脚を洗ふべき事をイエス様が御命令されたと書いた箇所がない。此の三冊の福音書は早く書かれ、長い間教会の中で讀まれ、信者は誰でもこの三冊を信仰の標準とし、その中のイエス様の教へを一生涯実行してゐる。その中には脚を洗ふ記事や命令は少しも書かれてゐない。手脚や顔を洗ふ事と救はれる事とは無關係である。何故脚を洗ふ事を大切な事とするか？その様な理由は存在しない。

キリストの昇天後六十年に、ヨハネはヨハネ福音書を書いた。その十三章に一回イエス様が弟子達の脚を洗つた記事がある。此の仕事は下僕の事で、イエス様はかく自分で下僕になつた事を言はれ、ピリピ書の二章五~七節には「汝らキリスト、イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて空しうし下僕の貌をとりて人の如くなれり」とある。

キリストは弟子達に謙遜である様に教へ、お互ひに人の爲に働き、他人のすかない仕事をも善んでする様に教へられ、常に多くの方法に依り機会を見つけてこの教へを教へられた。その中此の脚を洗ふ教は最も力があり、弟子達にお互ひの間でも、この様な謙遜な心がなければならぬと教へたのである。それ故に脚を洗ふ教へ全體は謙遜を教へるもので、宗教上の儀式を立てる爲のものでないと言ふ事は、自らはつきりとしてゐる。

若し、私共が文字の意義其儘をとつて、之をイエス様の御命令として従ふならば、新約聖書の中には、又色々なイエス様の御命令があるから、私共も文字的に同じ様な方法で従はねばならない。例へばペテロ前書五章十四節に「汝ら愛の接吻をもつて互ひに安否を問へ」とある。私共は今日、何故この命令に従はないのか？此の二つの事は、同じ様な意味の事である。一方に従つたならば、他方にも従ふのが當然である。接吻をもつて互ひに安否を問ふ事は昔の人の習慣で、今日私共には此の習慣がなく、又大切な事でない。今日私共は、家に入る前に毎回脚を洗ふ事もない。道上で友達に会つた時、接吻をもつて互ひに安否を問ふ事も決して悪くはないが、之を以て、宗教上の儀式とし、又聖書を其の様に解釋する事は誤りである。テモテ前書五章十節には「善き業の声聞あり、或は惱める者を助くる等もろもろの善き業に従ひし者たるべし」とある。之も脚を洗ふ事についてで寡婦を教会に受入れる事に就ての記事である。其中には色々な資格を書いてゐるが、之の中の一、二の善き行を話すと、子女を育て、旅人をもてなす如きも基督教信者の謙遜の精神の現はれとしては當然である、基督教信者の謙遜の精神は毎日の謙遜な行ひとして現はれねばならず、そして毎日の行ひの中で一番賤し

い仕事は他人の脚を洗ふ事である。其故に、此様な人のいやがる賤しい仕事をすべきでないと思ふ者は教会員となる資格がない。之が毎日跣足で汚れた所を歩いて生活してゐる地方の人達の、脚を洗ふ事が毎日の謙遜の現はれと考へる所以である。パウロが若し脚を洗ふ事を宗教上の儀式としたならば、全ての謙遜の意義を失つてしまふ。脚を洗ふは一種の行爲で、教会に入る宗教的儀式と見る事が出来ず、他に何んの目的があつて行ふものでもない。之を家庭にて脚の埃を拂ふ事として行ふならば、これは本當に謙遜の証據である。

今日信者になる一つの條件として他の信者の脚を洗つたか？ 否か？を入れても信者の資格と謙遜の証據にならない。

4 安息日の問題

真耶穌教や安息日会の信者は、第四誡を根據として、第七日に安息すべきで、決して第一日ではないと主張する。(出エジプト記二十章八節「安息日を憶えて、之を聖くすべし、六日の間勞きて汝の一切の事をなすべし、七日は汝の神エホバの安息なれば、何の業務をも爲すべからず。」マタイ十二章八節「それ人の子は安息日の主たるなり」ルカ傳二十四章一節「一週の初の日、朝まだき、女たち備へたる香料を携へて墓に行く」使徒行傳十三章十四節「彼らはペルガより進み往きてピンデヤのアンテオケに到り、安息日に会堂に入りて坐せり」)

新約聖書は基督教の書物である故に此の闡題は、新約聖書に照して考へるべきである。律法に關しユダヤ教の信者達は、舊約聖書を非常に重要と見てゐるが、私共は新約聖書がより重要である。

キリスト時代以後、新約のキリスト教信者は七日の第一日を安息日として守つた故私共も此の日を安息日として守つてゐる。真耶穌教信者は第七日を安息日と考へるが私共は第一日を正當な日と考へる、然し、何故第一日を安息日として守る様になつたかを考へて見たいと思ふ。

- 1) キリストの死人の中から甦へたのは一週の第一日である。(ユダヤ人の安息日の次の日) その日マリヤ達が墓に來た時、墓の空いてゐるのを見た。(ルカ傳二十四章一節)
- 2) 此の日イエスは二人の弟子に現はれ、パンを割き、感謝した。(ルカ二十四章十三~二十九節 ヨハネ傳二十章一~二十五節)
- 3) 八日後、即ちユダヤ人の第一日に、イエスは又その弟子に現はれた。(ヨハネ傳二十章二十六節)

以上の事實に於いてもわかる様に、キリストは弟子達に、一週間の初の日を安息日として守る様に印象させたかつた事がわかる、又弟子達も最初から忠実に一週の初の日を安息日として守つた。

- 4) 基督教会は一週間の最初の日に集り、又弟子達は第一日に集つて、主の晚餐を守つた。(使徒行傳二十章七節)
- 5) パウロは基督教信者は一週の初めの日に集つた時、献金することをすすめた。(コリント前書十六章一~二節)
- 6) 一週の初の日を主日(礼拝日)と呼び(黙示録一章十節)、之は一週の初の日を以て安息の日、礼拝日に定められた習慣を表す。

それ故に此の新約の時代に第七日を守る事は意味のない事である。彼らは、或はマタイ傳十二章九節、又は新約聖書の他の所で、ユダヤ人の安息日にイエスのとつた態度をあげて言ふが、然し

イエスの第七日を安息日として守った問題とキリスト教とは何んの関係もない。イエスはユダヤ人の全ての習慣に従った。イエスは割礼を受け、その祭節と礼式を守り、他にも非常に多くの事をユダヤ人の様に行つたが、イエスはキリスト教信者は皆ユダヤ人に様に歩みなさいとは言はれなかった。ユダヤ人はイエスに反抗し、イエスを十字架につけて殺した、若し、私共がイエスに従って之等の例に習ひ、宗教上の儀式を守るのであれば私共は全てのユダヤ教の教へに従はねばならない。私共は自分の考へで他をとり、正しいものを棄てる事は出来ない。されば私共は今一度、イエスの昇天後、基督教会ね設立された時の信者達をふりかへつて見なければいけない。そして何か第七日を守る証據があるか？を見るべきである。使徒行傳十三章十四節を見ると「彼らはペルガより進み往きてピシデヤのアンテオケに到り安息日に会堂に入りて坐せり」とある。此處ではパウロが第七日に会堂に入つたのを見る、然し私共の知らねばならないのはパウロは宣教師で機会をみつけてはユダヤ人をキリストに導く事に努力してゐる。それ故第七日に会堂に入つたのも自然の結果で、そこでキリスト教を宣傳するのである。パウロはそこで教へ、キリストを傳へ、人として歩まねばならない道を話した。私共が考へても知るやうに、それ等の人人はキリスト教信者でない故パウロはいつもその様にした。

キリスト教信者はどうして第一日に集会しなければならないかを知らうと思へば、パウロの各教会に送つた手紙を見ると、例へばコリント前書十六章二節「一週の初の日のごとに----」、使徒行傳二十章七節「一週の首の日、われらパンさ擘かんとて集りしが----」。此の二箇所に於て見るとわかるが此の人達はユダヤ人でなく、キリスト教信者であつた。それなのに現今のキリスト教信者は何故第七日を守るか？ユダヤ人はイエスの教へを知らないで第七日を守つた。しかしキリスト教信者は最初から一週の第一日を安息日として守つた。真耶穌教や安息日会の信者は或は一つの証據をあげるかも知れない。即ちマルコ傳十六章一節に「安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエス抹らんとして香料を買ひ」と書いてゐる。之らの人人は第一日の朝早く墓に來た、彼らは第七日に安悉息した。之は事實である。然し真耶穌教や安息日会の信者は聖書の此の邊を餘り理解してゐない。彼らは其時未だキリスト教の成立してゐなかつた事を忘れてゐる。それらはユダヤ人でイエスの復活も未だ知らず死んだと思つてゐた。聖靈も未だ降臨して居らず、従つてキリスト教会と言ふものもなかつた。五旬節に若し聖靈が降臨しなかつたならば、使徒達も、ユダヤやローマ政府を恐れたら、そんなに勇敢に福音を傳へなかつたであらうし、イエスの教へは恐らく五十年足らずで忘れられたであらう。以上のことでも知れる様にキリスト教を捨て、ユダヤ教信者になつた者でなければ第七日を守る様な事はしない。それ故安息日に就ては聖書に記す所にはつきりとし、その意義も明かである。第七日を守る様に教へる傳道者は十二分に安息日の音味を知らない爲である。

真耶穌教や安息日会の信者のある者は、コンスタンチヌス大帝が安息日を七日から第一日に變へたと言ふ者も居る。聞いた所道理にかなつた様にきこえるが、然し如何なる歴史書やその他の書物からもその証據を見出せない。

舊約時代の安息日は、神の天地創造完了の日で、世人にこれを憶えさせる記念の日であり、過越節は、エジプトの壓迫からイスラエル民族を救つた、神の愛の記念日で、舊約の神聖な日は皆、神の人民達を愛した記念日である。然し私共はユダヤ人ではないから、之等の記念日を守らない。私共はユダヤ教信者でなく、主イエスに依つて神の愛を知るに至つた者である。

キリスト教の歴史の中、最も重要な日は「主日」、即ちキリストの復活した日である。此の日を安息日として守るのも記念の爲であり、キリストの私共の罪の爲に死に、復活して私共の仲保となった事を記念する故、此の第一日を守らないものはキリストの事業を軽視してゐるのである。私共は既に「主日」を持ってゐるのに再びユダヤ人の舊安息日に逆戻りをしたら非常に悲しむべき事ある。舊い日は律法の日であり、新しい日は恩恵の日であるからである。

十誡は出エジプト記二十章二節「我は汝の神エホバ、汝をエジプトの地、その奴隷たる家より導き出せる者」を見てもわかる様に、ユダヤ人の爲に出されたものである。神によりエジプトから助け出された者は誰か？ユダヤ人で、ユダヤ教に属して居ない私共ではない。之は神がエジプトから助け出した民に話してゐるのである。それ故、神がイスラエル人達をすて、他の人達を選び、そして安息日を變へて第七日から第一日にしても、誰が神に向つて不可と言ひ、或は何故變へたかときく事が出来るか？新約聖書に於て神がかくなした事を多く語り、信者は神の示された通り歩めば充分である。コロサイ書二章十六節には「安息日の事につきて誰にも審かるな」と。

5 聖靈の問題

恐らく聖書の中で聖靈の教義程、誤つた解釋をされてゐるものはないでせう。真耶穌教やホーリネスの信者は、彼らのみが聖靈を受け、その力を得、其の爲に昔の使徒達の様に、異言を語り得ると主張する、然し彼等の異言と使徒達とは非常に異つた所がある。即ち使徒達の異言は、聞いてゐる人達に理解され、それに依つて幾千人も悔ひ改めてキリストを信じたのである。

一方面真耶穌教やホーリネスの異言は、意味のない言であり、自他共に理解しかねる言で、どのキリスト教信者が聞いても嫌味のさすものである。其上彼等は、その議論の正しいものである事を言はふとして聖書を間違つて解釋してゐる。例へば、マルコ五章四十一節に「幼児の手を執りてタリタクミと云ひたまふ、小女よ、我なんぢに言ふ、起きよとの意なり」である。此の所で實際キリストの話された語はキリストの幼い時からの言、アラマイク語(現在のスリヤ、メソポタミヤの語)で話されたのである。然し真耶穌教やホーリネスの信者は、イエスが此時異言を話されたのであつて、此の語は別に意味がないと言ふ。又マルコ傳五章三十四節に「三時にイエス大聲に、エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ、と呼はり給ふ」とある。之は十字架上のイエスの話された語である。之をも彼らはイエスが異言を話されたのだと言ふ、之に依つて見と彼らは聖書を知らず、又アラマイク語がパレスタインの通用語であり、イエス、キリストが此の語を使つてゐると言ふ事を知つてゐない。

イスラエルの人達はバビロンに七十年間(B.C581---)捕はれてゐる間に、アラマイク語はユダヤの通用語になつた。(此の七十年間、子から孫へと、その國の語を習ひ、七十年後、パレスタインに歸つて後も通用語となつた)その文字はヘブル文字と同じく、ある語は非常に似てゐた。舊約聖書のエズラ、ダニエル兩書はアラマイク語で書かれ、今や英語、國語等各國語に釋されてゐる。それ故アラマイク語を使用してゐたイエスの答へられたのはアラマイク語である。真耶穌教やホーリネスの信者が異言だと主張するのは彼らは之知らないばかりでなく聖書の大部分を知らない。使徒行傳二章には、使徒達の聖靈に満された記事がある。其時使徒達は種種異邦の言で救主イエスの証人となり、各國の語を話したのである事は、その章に依つても知り得る。コリント前書+四

章にもパウロは異言を語る事に就て論じてある。そこでパウロは人に理解の出来なり異言を語る事に就て論じてある。例へば 27,28 節に記されてある様に異言を語る者は、それを理解する者が居り、又集会に出席してある全ての者の語をきく事の出来る者でなければならない。之コリント教会に送った手紙であり、ギリシヤの教会である故にアラマイク語、ヘブル語で話したり、祈ったりしても、それを理解する者が居らねば何んの利益もない。

若し異邦の言を話す恩賜を今日有する者が居り、その語る所を理解されるのであれば非常に喜ばしい事であり、未だキリストを知らない所に、大いに神あ聖名を宣傳ふる助となるのである。唯異言だけを語る事を力説しても何の利益もない。口の中でモグモグと他人に理解出来ない語を語り、未信者をしてその家が教会か、精神病院であるかを疑はしめるのみで人に利益する所がなからう。

真耶穌教会以外にペンテコステ教会、神の教會、火の柱教会等と名付けて異言を語る事を主張する教会があり、互ひに良く似た所がある。そして自分達のみが真で、他は偽り、自分達には聖靈に満されてあるが、他にはなく、自分達は救はれ、他は救はれないと言ふ。然し彼等は實際、聖靈に満された様に見えず、空中に向つて大聲で叫び、ふるへたり、土の上でころび椅子の下にはひ、氣狂の様に舞つたりして、何一つとして私共から見て聖靈に満たされ、キリストの心を持つてゐる様に思はれる所がない。キリストは一度も此の様にはされてゐないが聖靈に満されてゐた。真耶穌教の信者達は、あはれにもキリストを知らず、氣狂の様な行動をして未信者をキリストに導く事が出来ないばかりでなく、反つてつまづかす所が多い。

「されど聖靈の果は、愛、喜悅、平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制なり、斯るものを禁ずる律法はあらず」(ガラテヤ五章二十二到二十三節)

6 洗禮の問題

聖書中、洗禮に就て語る所が多い故此の問題に就ては多く研究出来る。真耶穌教や浸信会の信者は、普通聖書の二箇所の聖句を引用して浸禮の正しきと主張する。其の中の一つは福音書中のイエスの受洗の記事で、其他使徒行傳八章二十七到三十八節、エチオピア女王の權官のピリポより受洗した記事である。

今、此の二箇所の聖書を先に研究したい。先づイエスの受洗であるが、福音書中では、如何なる方法による受洗かを記してゐないが、ヨハネは荒野からヨルダン河た來た故、最も簡単な方法で、受洗者を川岸に立たし、授洗者が手に水をつけて受洗者の頭に落す様にすると思はれるが、この方法は決して重要な問題ではない故聖書中には如何なる方法とも記してゐない。

聖書にはイエスが水から上つた事を記してゐるが、此の事と洗禮の方法とは全く関係のないものであり、唯イエスが受洗した時、水中に立ってゐた事を示すのみである。洗禮はどの方法であつたとも私共は斷定出来ないが、教会歴史を研究すると、キリストの時代は普通頭に水を落して洗禮し、初代教会も、現今の大部分の教会も同じである。

次はエチオピアの權官のピリポよりの受洗であるが、之はイエスの受洗と同じく荒野である故浸禮でない事は確かである。荒野には浸禮の出来る程の多量の水と深い河がなく、例へば荒野に

水があっても普通は浅くて水が少いからピリポと権官が水に入って洗禮し、すまして水から上るのはごく自然である。この様な場所での洗禮は浸禮でないのは當然で、この二つの場合の洗禮は共に今日私共の洗禮と異ってゐない。

私共が聖書の他の箇所を詳しく研究し、又當時の環境やその項の事情を知ったならば、浸禮は聖書の教へに合はない事を知るであらう。例へば使徒行傳第二章、エルサレムで一日の中に三千人が受洗した。この三千人が浸禮することは大きな問題である。何故かと言ふと、其時は雨のない乾燥期で、水が少く、其上エルサレムは海拔 2550 尺、死海よりも 4000 も高い所にある。その近くには河も湖もなく、ケデロン河も此の無雨期には乾き切つて居る。ケデロン河は唯冬の雨期のみ水がある。其上當時風呂桶の設備もないから浸禮する場所もない。エルサレムでは水の價が高く、又非常に深い井戸から扱まねばならない。此の様に水の少い所で同一日に三千人に浸禮する事は絶対にあり得ない。

又獄守の受洗(使徒行傳十六章卅三節)もその洗禮は真夜中の監獄内で果して浸禮は可能であらうか？

以上は聖書中、洗禮に関する箇所、之等に依ても知れる様に、其の時、其の時に依り浸禮の方法とはなり得ず、聖書の記事の中で何一つとして浸禮の証據にならない。例へ之を疑ふ者が居ても、私共は、洗禮は以上つ様なものである事を確信する。

洗禮は、宗教上重要な儀式の一つで、神との約束を意味し、水の多寡は、洗禮の意味と大した関係はない。洗禮の意味は、キリストを人類の救主と信じ、人類を罪から救ひ、又私共の罪はキリストに依り、きれいに洗ひ消されたから、自らの罪を認め、神に對し、私共の此の様に信じてゐる事を約束する記号として受洗するのである。受洗のみで人の罪はなくならず、キリストを信じねばならない。キリストを信じて神と約束し、心の全く清められた記号に受洗するのである。

真耶穌教と浸信会の一部では彼等の浸禮を受けなければ救はれないと言ふが、それは神との約束である洗禮を輕視させるものである。その約束は、人との約束ではなく神との約束である。それ故、再び他の洗禮を受ける事は、此の聖なる神との約束を無視する事となる。彼らは、自分達を真の耶穌教、真のキリスト教と言ふが、その教へる所を研究してみると、その教へは聖書から出たものではなく、常識から外れてゐる。何處に行つてもキリストを救主として信ずる聖徒を困らし、又惑はし、彼等に依らねば地獄に入ると教へる。之は信仰あり、責任める信者の口にしない言である。

神のみが人の善惡を判斷する權を有する。彼等は教会、傳道者、病院其他教会のすべての慈善事業の敵で、サタンと同じ様な行爲をしてゐるのである。

「惡しき人と人を欺く者とは、ますます惡にすすみ、人を惑し、また人に惑されん」

(テモテ後書三章十三節)